教職支援室便り（９月号）

令和５年　９月　８日　（金）
文責：教職支援室　曽我文敏
☎０９８５－２０－４８０８

宮崎公立大学の「教職特別講座」に思う！

４年生との「教職特別講座」もスタートして、もうすぐ１年になります。これまで、１３０コマ（１コマ９０分）以上の演習の中で、学生の皆さんは自己啓発を図りながら、教員採用選考試験（筆記試験・面接試験等）に関する演習を多面的・多角的に行い、教員になるための基本的な知識や技能等を習得するとともに、教員としての資質・能力を高めてきました。具体的には、人としての内面的な資質（誠実さ、協調性、コミュニケーション力、学び続ける姿勢など）」や、教員としての専門性の基礎（児童生徒理解力、授業力、教育的愛情など）」を、教職教養、専門教養、面接、模擬授業、小論などの演習プロセスの中で、培ってきました。担当者としては、「この『教職特別講座』は、試験合格のためだけにあるのではなく、学生の皆さん一人一人が、教員になりたい自分を見つめ続ける学びである。」と考えます。本年度は、多くの学生の皆さんが、これまでの卒業生と同様、そのような意識で誠実に真正面から「教職特別講座」に取り組みましたが、一部これまでにない課題も残りました。今後の課題として、次年度に生かしていきます。

また、私にとっても、「教職特別講座」で学生の皆さんと共有した時間は、貴重な財産になっています。そのことを踏まえ、担当者としての自覚をもち、「教職特別講座」や授業等を通して、更に充実した支援ができるよう、自己研鑽に励みたいと思います。そして、今後も、この「教職特別講座」を、宮崎公立大学ならではの講座として、私のオリジナルな講座として大切にしていきます。

次に、学生の皆さんの、第二次試験を終えての感想の一部を紹介します。

＜第二次試験を終えての感想＞

二次試験を無事に終えることができた。

二次試験当日は緊張してしまった部分などがあったが、自分のできることを精一杯できたと考えている。小論文では、先生に指導して頂いた、小論文の構成やポイント、用いるべきフレーズなど様々な事が本番で役立ち、小論文を書くことができ、個人面接では、「４１５面接試問集」や面接の回答例などをパソコンにまとめ、印刷したものなどを持参し、直前まで確認できたため、少し慌てることもあったが、沈黙になることはなく、答えられた。また、面接などの二次試験では一次試験対策で身に付けた知識なども必要となり、今回は、それらの知識を上手く活用することができたことで、本番の試験でも頑張ることができたのではないかと考えている。

これまでの教職特別講座で様々な演習をこなし、二次試験の前に特別講座を通して多くのことを学べたことで、本番で緊張しながらも精一杯できたと考えている。先生には暑く、忙しい期間にも関わらず、支援して頂き、感謝の言葉しかありません。先生のおかげで、ここまでの力を身に付け、本番で発揮できたと考えています。本当に、ありがとうございました。

第二次試験を終えての感想は、１０月号においても掲載したいと思います。

教職課程授業「教育実習事後指導」への支援
外部講師の先生方に感謝！！！

本年７月１８日（火）、教職課程授業「教育実習事後指導」において、外部講師として、２名の先生をお迎えし、教職の魅力や課題等について講話をしていただきました。２名の先生は、
元宮崎市立大宮中学校校長　　水元重夫（みずもと　しげお）先生
元宮崎県立宮崎大宮高等学校　渡部祐一（わたなべ　ゆういち）先生　です。

当日は、中学校、高等学校の２つのグループに分かれ、中学校：水元重夫先生、高等学校：渡部祐一先生に担当していただき、充実した時間となりました。特に教育の本質に迫る講話は、学生の皆さんにとって、大変貴重なものとなりました。２名の先生方、お忙しい中、本当にありがとうございました。心から感謝申し上げます。

＜中学校：水元重夫先生＞

＜高等学校：渡部祐一先生＞

学生の皆さんの感想の一部を紹介します。

＜中学校＞

私は、今回の講話で水元先生の実体験をお聴きして、生徒指導に対する認識の再確認をすることができた。「何かがあってからではなく、何もないときからやっていく」という言葉や、全ての生徒がより良い学校生活、より良い人生を歩めるようにするという考え方から、水元先生はその活動として、時間を守る、無言清掃、挨拶をする、靴を並べる、からかいやいじりをしないという５つのことを実際に行っていた。それに加えて、新しい学校に赴任してすぐに天井の穴を塞いだり、返事の徹底を行ったりもしたと述べられた。そして、その結果、生徒の問題行動が減少したという話を聴き、何かが起こった後ではなく、日常生活の面から体制を整えておくということが生徒の学校生活や人格を形成する上でとても大切なことだと感じた。また、生徒の将来のために学校では様々な指導を行うが、生徒がその指導を自分にとって必要のないもの、嫌なものだと感じれば、指導は全く通らなくなってしまう。生徒にその指導が自分にとって意味のあるものだと思ってもらうには、その指導をなぜ行うのか、何につながるのかということを説明して納得してもらう必要がある。その前提として、生徒自身が「素直な心」を持つこと、またそのために教員も生徒を信じ、尊重することが重要だと気づかされた。

水元先生がおっしゃった「何かがあってからではなく、何もないときからやっていく」という言葉は、学校の教員という職業だけでなく、学校外での職業や生活にも活かされるものだと感じた。そのため、これから自分の人生を歩んでいく上でも、大切にしたい言葉だと思う。

＜中学校＞
　水元先生のお話を聞いて、求められる教員の資質・能力として考えたものは、これからの困難などを乗り越えていこうと努力する態度です。教育実習を迎えて、初めて教壇に立って、大変なことや楽しかったこと色々な面での学校現場を経験しました。しかし、その困難を乗り越えたとき、今まででは想像できないほどのやりがいと満足感、充実感を感じることができました。困難があったとしても、乗り越えるために努力をすれば、こんな気持ちになることができるのだと気付くことができました。ただ、私が経験したものはごく一部でしかないこともわかっています。そのうえで、刻一刻と変化していく時代、環境の中で今まで出会ったことのない未知の課題や困難にも、多くぶつかることもあると思います。そんななかでも、乗り越えるために努力する気持ちが、何より大事なのだということがわかりました。教育実習事後指導でもそれぞれの大変だったこと、それをどのように乗り越えたのか、またどうすれば乗り越えることができるのかなど多く協議してきました。これこそが学び続ける姿勢でもあり、困難を乗り越えていくために、努力する態度にも当てはまるのだと思います。

＜高等学校＞
　渡部先生の考える教員に求められる資質・能力は、教科を教える力と心を育てる力であると話してくださった。教員はものや製品、企業などを相手にするのではなく、これからの社会をつくり、担っていく存在の子どもたちを相手にする仕事である。次の世代を育てることが仕事でありそれに専念して給料をいただくのが教員である。子どもたちを育てていくということは、子どもたちの頭と心を育てていくということになる。
　教員の主な仕事内容である教科指導力はいうまでもなく重要であり、英語科の場合は指導力と英語力を向上させることが大切になってくる。指導力に関しては、正しい答えが一つ存在するようなものではないため、常にアンテナを張り、他の教員の指導方法や本に載っているものなどを吸収し実際に試してみることで、自分自身や生徒にマッチするかどうかを判断して取捨選択していくことで、より指導力を強化することができる。英語のスキルアップについては、英検やTOEICなどの資格試験を健康診断のように定期的に受検することを渡部先生は強く勧めていた。普段からできるものとしては、シャドウイングと英語の歌が効果的であると教えていただいた。シャドウイングについては、英検やTOEICのリスニング音声を使ってすることや、英語の歌は自分自身がまずはしっかり聴いて歌えるようになったものを、生徒にも共有・還元していたことなどを語ってくださった。

　渡部先生の講演からはたくさんの刺激を得ることができた。講演を踏まえ、私自身に求めたい資質・能力は、見捨てない・諦めない姿勢や生徒を想う心、教育的愛情であると感じた。私はこれまでの人生経験から、他人に対して深く干渉しすぎたり感情を入れ込みすぎたりすると自分自身が疲れてしまったり、自分の予想していた結果にならなかった際に深く傷ついたり、ひどく落ち込んでしまったりすることがとても多かった。そういった経験から、他人にはあまり期待しないほうがいいかもしれないと思ったり、深く入り込みすぎないほうがいいだろうと思ったりしていた。そのため、生徒があまりいいとは言えない行動を取ったり、勉強に対してやる気がなかったりしても、それであとから悔やむのは生徒自身であるから叱ったりしたくないなと考えていた時期があった。しかし、今回の講演や教育実習を経験してからはその考えは教員として正しい在り方ではないだろうと感じた。まだまだ他者とのかかわりや所属するコミュニティ経験の浅い子どもたちに、もっとも身近な存在かつ長い時間を一緒に過ごすのは教員であり、その教員が未来への希望溢れる生徒に対して、最初から見切りをつけ、あまり干渉しすぎないようにしようと思うことは、生徒の可能性を消してしまうことになる。日頃から生徒の素敵な部分はほめて、よくないことはよくないとしっかり伝え、時には心を鬼にして叱ることも生徒を想う心であると考える。成績が思うように伸びなくても教員が諦めたりせず、試行錯誤して試してみることで道は開けるはずであるし、教員が生徒のことを信じる気持ちを持っていれば、生徒もついてきてくれることも、教育実習で経験することができた。

道徳の教科化に思う！（シリーズ７６）

平成２９年の６月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。

今回は、「道徳科における評価を考える」をテーマに、その１として「道徳の教科化の背景と評価導入の意図、学習指導要領における道徳科の評価」について掲載します。

◇　道徳の教科化の背景と評価導入の意図

昭和３３年に「道徳の時間」が新設されて以来、その定着、充実のために、多くの教師が道徳授業の研究実践に取り組んできた。その中には、児童生徒が自分との関わりの中で、様々な角度から登場人物の生き方を話し合うなど、真正面から授業に向き合う実践も数多くあった。そこには、徹底した教材分析や価値分析、きめ細かな発問構成などの、本来的な道徳研究がなされていたと言える。

しかし一方で、道徳授業が他教科の授業に比べて軽んじられる傾向の中、道徳授業を行わない教師、感想を言わせて終わる教師、分かりきったことを言わせる教師がいるなど、道徳授業に係る指導力の格差が広がってきたことも事実である。また、主題やねらいの設定が不十分な道徳授業（読み物の登場人物の、心情の読み取りに偏った、形式的な道徳授業）が多い、という指摘も聞かれる。加えて、いじめ問題をはじめとする生徒指導上の問題が、年々深刻さを増してきたことにより、道徳教育、とりわけ道徳授業に対する厳しい批判に拍車がかかった。こうした背景を踏まえ、道徳は「特別の教科　道徳（以下、道徳科）」として、位置付けられたのである。

さて、道徳科となり、児童生徒への評価が求められることになったが、これは、評価を授業改善の切り札とする意図があると考える。児童生徒の学習の充実度は、教師の授業力に大きく左右されることは言うまでもない。つまり、評価に耐えられるような授業を行うこと、質の高い授業（道徳科の特質を踏まえた授業）を実践することが重要な課題と認識できる。そして、今回の改訂で、道徳科の学習活動（特質）（次頁資料）が明確に示され、それが評価の留意点に組み込まれたことも理解できる。評価することが目的ではなく、評価ができる質の高い授業を行うことが、充実した評価を可能とすると言える。

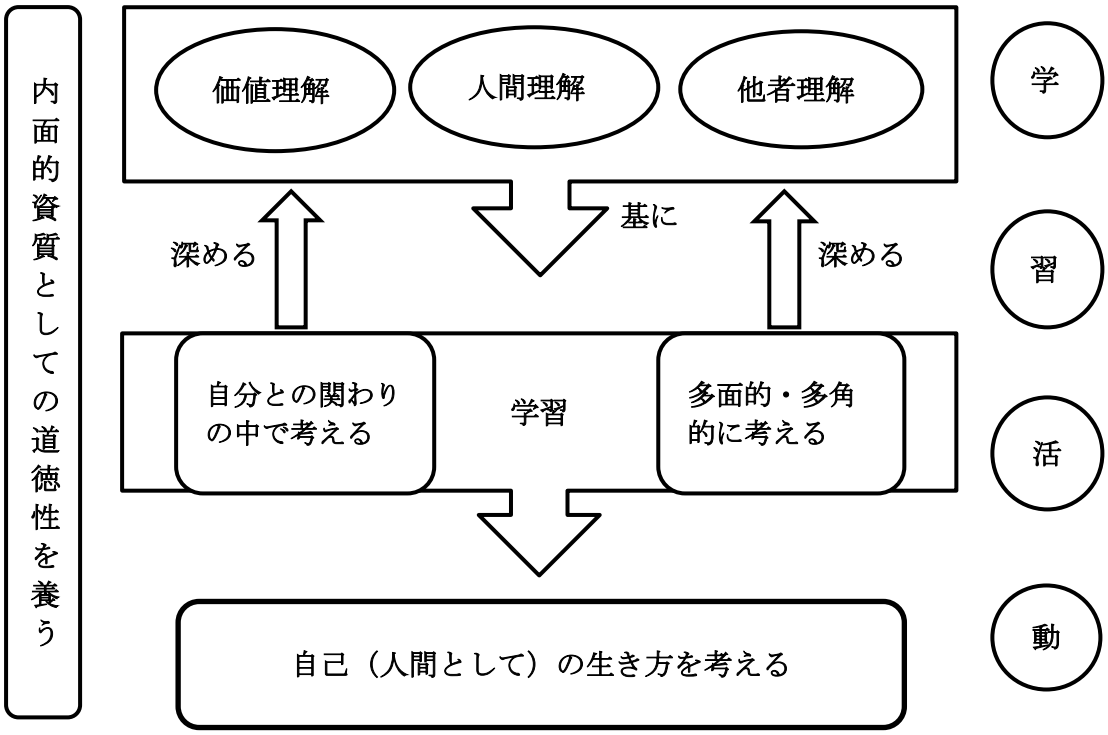
◇　学習指導要領における道徳科の評価

道徳教育及び道徳（道徳科）の時間の評価について、学習指導要領解説（平成２０年改訂、平成２９年改訂）には、次のように述べられている。

> 平成２０年改訂・・・道徳教育及び道徳の時間における評価
> 児童（生徒）の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。

> 平成２９年改訂・・・道徳科における評価
> 児童（生徒）の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

平成２０年改訂と平成２９年改訂の共通する点は、まず「指導に生かすよう努める」であり、指導を評価に生かす、評価を指導に生かすという、指導と評価の一体化を示している。そして、「数値などによる評価は行わないものとする」とし、道徳性の評価については十分に考慮するよう規定している。他教科における評定と同様ではないということである。

また、変更点としては、平成２０年改訂では、道徳教育の評価と道徳の時間の評価を示していたが、平成２９年改訂では「学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し～」とした。「学習状況」や「道徳性に係る成長の様子」について、前向きな取組を促している。

参考資料
「道徳科の学習活動（特質）」